

『鉄道と旅する身体の近代』

川村 清志

はじめに

現代において民俗学という引き裂かれた言説を自らの身体に引き受けてしまった者が、幾多の矛盾と困難のなかで、あらゆる限りの誠実さと逃れられない苦悩と密やかな快樂までをも交えつつ記述を重ねていけば一体、いかなる本が生まれるのだろうか。そんな間の抜けた問いへの答えはひとまずおくとして、本書は、日本の近代化の過程で展開した旅と移動をめぐる物語の諸相を捉えなおそうとする試みである。明治以後、鉄道を中心とする交通網が発達するなかで、旅の先々で遭遇する伝説や民謡が、紙媒体を中心に展開していった。筆者は、そこで生成した物語の多様な展開を紹介しながら、それらを受けて新たに構築されて

いった民俗学的な口承文芸研究の視座を捉え直していく。

本書が参照し、提示する資料は、驚くほど多岐にわたる。記念スタンプ、蒐印帳、葉、絵はがき、ソノシート、新聞、各地の民謡集・伝説集、昔話集、民話集、名所案内記、路線図、学術、観光、文芸、ファッション関係など様々な種類の雑誌類、広告代理店のキャンペーン、パンフレット、旅の案内板、史跡の看板、駅名、地名、自販機のコピー、雑誌や本への書き込み、研究者たちによる伝説、昔話、世間話の『報告書』、

自らが聞き取りを行った口述資料、などなど。資料が表象する時代も明治の終わりから、戦前、戦中、戦後、高度経済成長期を経て二〇〇〇年代まで、一〇〇年以上のストパンがある。

これら多様な資料を縦横無尽に駆け抜けながら著者は、民俗学、ないしは口承文芸研究といった領域を内破し、新たな記述の可能性を探求する旅へと読者を誘っているかのようである。評者はこの試みを、交通網^{トウフイックス}と身体^{ポデー}と紙媒体^{プリント}の交錯するテキストとして読んでいきたい。以下では、まず、本書の概略について記していく。あとがきを入れると五五〇頁を超える長大なテキストは、概略の紹介にも一定の紙面を割かざるをえない。次にここで記された著者の視座の特質を明らかにする。そのうえで、時間的にも空間的にも多様な資料を峻別する著者の眼差しの可能性と課題について考えていくことにする。

本書の構成と概略

本書は、以下のような構成となっている。まず序章では、鉄道以前の人と人、地域と地域を結んでいた峠の風景、あるいは峠を越えていく旅の経験が語り起こされる。それは、近代化のなかで見失われていった旅のあり方、身体と場所との記憶の断片

である。このエピソードに続いて、本書の要諦が具現化された《声》によって整理されていく。その上で著者は、研究分野が見失って久しい伝説への想像力を喚起し、柳田国男が構築した口承文芸研究との再接続を試みることを宣言する。

第1章から5章までが、第一部「旅と伝説——民謡・伝説から民話へ」を構成する。そこでは、鉄道とともに展開していく旅が、様々な紙媒体を通して身体化され、多層的な物語を構成していく動態が示される。

第1章は、鉄道旅行という近代日本に出現した新たな移動の形態の意外な一面を指摘することから始まる。旅の途上でスタンプされていく蒐印の山である。旅の記憶を身体化する装置としての蒐印という制度が、鉄道とともに広がっていった過程が具現化される。スタンプは蒐印帳に押されるだけでなく、旅の案内記や各地の昔話集、伝説集にも押されていく。それらの紙媒体に記された名所や旧跡の物語の外側には、当の伝説や民謡を「たどる」旅行者の物語が存在していたのである。スタンプは各々

の旅の思い出として、書かれた物語のなかに自らの旅の物語を刻印する行為でもあった。

このような営みを著者は、今日の研究者の視点と対比しながら、「趣味」豊かに人々に楽しみを与えていた伝承のありよう」(七六―七七)と位置づける。このような

近代における「伝承の動態」こそが、本書の前半のテーマとなる《伝説・民謡》である。「伝説や民謡は土地を物語る言葉として歴史の厚みとなり、旅の想像力をかき立てながら名所の風景を描き出す」(六七)。ところが、伝説や民謡をめぐる楽しみやそこで駆使された想像力は、伝説が研究の対象として、確立していくなかで見失われてしまう。「民俗学や口承文芸研究が活性化する培地でありながら、研究者が向き合うことを避けてきたそうした伝承の動態を明らかにする視点」(七七)が、《伝説・民謡》である。

第2章は、大正から昭和初期にかけて、《伝説・民謡》によって前景化された旅の軌跡が示される。当時の新聞や書物は、人

びとを交通網トランザクションによる旅へと誘う想像力を喚起していった。その中核となるのが、《伝説・民謡》である。人びとは紙媒体上の物語に触発されて、伝説や民謡の舞台となる名所旧蹟を訪れる。彼らにとつての伝説とは、文字としての伝説であり、それらを携帯しながら、「たずねる」(さぐる)「たしかめる」(九六)旅が行われていたのである。

また、《伝説・民謡》の楽しみを人々に喚起していったテキストとして、主に松川二郎が紹介される。松川のテキストには、「いわれのある松や石と宿屋での民謡」(九八)が目白押しに掲載されている。そこに「食」と「色」が加わることで、当時の旅が「男」の旅であったことが明らかにされる。また、これら旅の案内記は、読者が実際に鉄道を利用して旅するだけでなく、そのような旅を「いながら」にして書齋で経験することを可能にしていた。

さらに当時の蒐集趣味も旅への想像力を喚起していた。旅先で思い出となる物を集めたりするだけでなく、「集めることを目的に足を運ぶ移動」(一〇五)も行われ

ることになる。このような「能動的な身体
の扱い方」を筆者は、各地の伝説や民謡を
〈たずね〉〈たしかめる〉身体と同じく「蒐
集される「もの」の外側に物語が織り成」

(二〇五) していく過程と捉えている。

第3章は、紙媒体のうえで展開してきた
《伝説・民謡》の位相がさらに詳しく論じ
られる。紙面上で喚起された鉄道旅行は、
〈いながら〉の読者に日本各地についての
想像力だけでなく、国家の境界を拡大させ
る想像力をもたらし去った。交通網の拡
張によって北海道、さらには朝鮮や満州の
風景さえ物が物と捉える結節点に、《伝説・
民謡》は接続されていったのである。

戦前の旅が「男」の欲望を喚起するも
のであったことも改めて確かめられる。伝
説は「情話」や「ロマンズ」が付与さ
れることで、「旅先での恋物語を思い描」
(一五八) く準拠枠とされていった。もち
ろん、このようなローマンズ化、あるいは
「当世風の潤色」を加えられた伝説は、柳
田が自らの研究の地平から排除し、その後
の民俗学も等閑視してき領域である。しか

し、そこには、「男の」都合で組み上げら
れた旅のなかで発現した《民謡・伝説》の
「楽しさ」(一五八―一五九) が表出されて
もいた。

第4章では、柳田による旅の批判、すな
わち、近代以前からの〈たしかめる〉〈た
ずねる〉旅のあり方への批判が再考される。
柳田は、この時、新たな「風景」を自らの
目で見出す旅を目指していた。

これまでの章で確認したように〈たし
かめる〉〈たずねる〉旅は、「読む」ことと
連動していた。旅の風景は、前近代からの
民謡や伝説に縁取られた物語に加え、名所
旧跡と風光明媚な自然についての言説を
整地してきた。近代以後の自然地理的な言

葉が、伝説と併用されてはいるが、「人々
の趣味は決して近代以前と切断されては
いない」(一七〇) とも記される。切断面
とともに両者を切り結ぶ回路、あるいは身
体に刻印された記憶を、本書は繰り返し注
視することになるだろう。そして、それと
は異なる風景への接近のあり方が柳田に
よって示される。その眼差しこそが、《民謡・

伝説》ではなく、《伝説・昔話》を招来す
ることになる。

《昔話・伝説》の目論みは、伝説から文飾
を排し、〈たずねる〉旅人の感傷を表出す
る紀行文的な表現を削除することであつ
た。柳田は直接「耳で聴いた」昔話や伝説
の採集を呼びかけ、それらを分類し、体系
化し、比較する「学問」としての道筋を構
想していた。こうして伝説は、名所に代表
される地元鼯鼠に偏することなく、また、
紀行文のような「一つの型に囚はれて居る」
ものでもなく、自らが、「きつと何か「い
はれ」が有るでしよう」(二〇五) と問い
かけ、その答えを耳で聴くものとして、理
解されることになる。

ただし、このような試みに関わらず、「旅
と伝説」をはじめとする多くの誌面は、《伝
説・民謡》的な側面を放棄しようとはしな
かった。伝説は〈たずねる〉身体との相性
がよく、旅への想像力を飛翔させる紙媒体
の読者が絶えることはなかったからである。
他方で柳田の《昔話・伝説》への姿勢は、
翼賛化する時代状況のなかで顕著となつ

ていった《神話・伝説》の位相に対抗する橋頭堡でもあったことが指摘される。《神話・伝説》の時代において伝説をめぐる想像力は、「日本精神の発揚」(二二五)といったナショナルなレベルに収斂していく。「郷土の偉人を顕彰する姿勢、あるいは、将士、英霊、銃後、国民といった戦時体制の身体と言葉」(二二二)が伝説の語りを包圍していく。「たどる」(めぐる)という

伝説享受は、国民一人一人の思考を停止させる力をも(二二二)もつていたのである。しかし、柳田は、「昔二」と「耳で聴いた話」(二二四)の収集と分類を呼びかけ、彼自身が記す『日本神話伝説集』にも、高天原の神々が登場することはない。彼は「《神話・伝説》の誘惑を徹底的に解体し、《昔話・伝説》研究を展開していった」(二二五)わけである。

第5章で時代は戦後へとシフトする。もちろん、それは完全な跳躍ではない。これまで期の章でも、中心的なテーマを示す大正期から昭和初期の事例のなかに、戦後の事例や筆者自身が見いだした現在形の事例

が挿入されていた。それと逆の作為が5章でも施される。一九六〇年代から七〇年代の事例が中心を占めるなかで、戦前の事例が様々な角度から呼び起こされる。

ここでテーマとされるのは、デイスカバー・ジャパンのキャンペーンによって喚起される新たな旅の形態と、そこに引き寄せられ、再結晶化していった《民話》という位相である。デイカパー・ジャパンでは、都市化し、文明化する生活に対して、人間性や、心の美しさが強調される。具体的に見いだされるのが、同時代から取り残されたつづあるノスタルジーを帯びたもの、地方の風景、旅する自己をうたう詩人、蒸気機関車、そして《民話》である。それらが戦前の《伝説・民謡》によって喚起される旅と異なるのは、「その主たるターゲットが若い女性だったこと」(二四三)にある。旅をする主体が女性である以上、「食」とともに旅につきものであったエロや「色」についての言及は影を潜める。

《民話》は一九五〇年代の「民話運動」に端を発する。この時期の「民話」には「支

配階級」に対する「民衆の抵抗」(二四九)という位置づけが明確に意識化されていた。しかし、デイスカパー・ジャパンが表象する《民話》には政治的な思想性は明示されない。批判されるのは、経済性を優先し、開発のために自然破壊も厭わない都市的な生活である。《民話》はノスタルジックな眼差しに縁取られながら、「平和や自然保護を願うメッセージの込められた取り組み」(二五三)として流通していく。結果として「物質的な豊かさは手に入れたが、本当に大切なものであるはずの心の豊かさを失った」(二六七)という「話型」が、繰り返して表明され、様々な層に浸透していった。

政治的な思想面を潜在化させた《民話》は、民俗学の分類項目である、「昔話、伝説、世間話」とほぼ等号で結ばれるという理解が確立していった過程も示される。かつて民俗学では、五〇年代の「民話」という用語のイデオロギー的な側面を危険視し、距離をとろうとした経緯があった。けれども、七〇年代以後に《民話》が流通していくな

かで、戦時下の《神話・伝説》から距離をおいていた柳田国男の《伝説・昔話》との連続性が着目されることになったのである。

次章の6章から8章までは、第二部「近代の風景観と身体感覚——移動する身体と地面との切断」となる。第二部は鉄道以外の交通網にも視野を広めつつ、それらの変容を経験してきた身体の側、彼らが発する《声》へと記述の中心がシフトしていく。

第6章「車窓の風景と車内の出来事」では、車窓によって切断された景色とそれらを眺める身体の消長が確認される。この章を著者は、千葉県の京葉線という車中とは断絶した風景が連なる車窓から語り始める。通勤車両が行き交い、名所や旧跡が完全に消失した地点から、失われた車窓の物語を補う固有名詞についての《声》や「車内」と向かい合うことで見いだされた《声》についての問いが開かれていく。

章の前半で著者が紹介するいくつかの案内記は、典型的な案内記よりも詳細な描写が記されている。それらは、「車窓」の風景を補い、それらとの「連絡」を期待す

る《声》でありながら、その詳細さゆえに「車内」と「書齋」との結びつきを強める効果も持ち合わせていた。すなわち、「腰掛けて読書をする身ぶりは車内と書齋との往復をもたらし、想像力によって人々が書物のなかで旅を楽しむことを可能にする」(二九三)のである。

また、旅の車内とともに通勤の車内における身体と紙媒体との接続についても言及される。通勤の車内は、車窓からも周囲の人々からも隔てられているようにみえる。「通勤は日々の繰り返しであるから」、車窓を流れ去っていく景色に関する「《声》との接続を求めようとはしない」(三一四)。翻って乗客たちは、車内という「世間」に目を移し、その見聞の有様を書くこととなる。あるいは、車内を自らの「書齋」とし、自らの経験や記憶が書き込まれていくこともあった。こうして車窓によって仕切られた車内での経験は、「(よむ)ことと(かく)ことについての近代の身ぶり」(三一五)において、民俗学の営為と再び切り結ばれていることが確認される。

第7章「自動車が行く暮らし」では、話題の中心は鉄道から離れ、徒歩から馬車、そして自動車へと展開してきたもう一つトライックスの交通網へと移行する。受動的な鉄道の旅に對して、自らが運転する車での移動は、時には過剰な能動性を身体ボディにもたらす。ただその一方で、車窓からの眺めは限定され、「運転者の視点は、前窓に映る景色に限定される」(三三〇)。

この章からは聞き取りによる語りや、資料の中心をなしていく。それらの語りによって、交通網との関わりがなかに刻印された地域の歴史や身体ボディの記憶がひもとかれる。例えば、かつての野菜の出荷についての語りは、自動車以前、つまり、整備され、直線化され、アスファルト化される以前の道とのつながりを想起させる。このような語りは、「それ以前の生活と現在の連続性」を確認するものであり、生活者にとっては「土地に厚みが増えられ」ることで「風景として結像する」(三三〇)のである。ただし、ハイウェイに代表される直線化されていく道は、人びとと土地との接触

をさらに希薄する方向にも作用した。「道

路が自動車にとって「快適で安全」なものになるにつれて、運転手でさえ土地との接触を失っていくのである」(三四五)。かつての生活空間を寸断して造成されたこれらの道路については、しばしば怪談やうわさ話の形を取った不快感が表明されることになる。他方で地域の生業と結びついた直線の舗装道路が、否定的に語られることは少ない。「直線化された道路そのものが、自らが苦勞していた頃とは生活が一新されている快さを確かめる焦点ともなる」(三五二)からである。交通網をめぐる語りにも、両義的な側面があることを著者は正確に見抜いている。

第8章「移動する身体と危険回避の伝承」もまた、著者自身の身体ボディが話者の身体と交錯するなかで得られた語りが示される。この章でテーマとなるのは、危険回避の伝承や狸やキツネの伝承などの定型化された「世間話」のバリエーションである。いずれの語りも、交通網トラフィックが人びとの生活と切り結んできた風景の記憶のなかに結像し

ている。

危険回避の伝承とは、「朝茶の功德」と呼ばれる「昔話」の異話として提示される。著者は、朝茶を飲むと災いから逃れられると言う昔話の「話型」が世間話として展開している現場を紹介する。ここでは、「生活の理」によつて成型された語りが、カテキンやテアニンといった科学的な言葉によつて上書きされていく過程さえも示されることになる。

狐狸に化かされたという「世間話」のカテゴリーで採集されるもつともポピュラーな語りからも、したたかな「生活の理」と「近代の理、科学の理」との緩やかな接続の軌跡が辿られる。「化かされる」経験は場所と身体との分ちがたい感覚に根ざしている。そのような経験を言葉へと変換するなかで、「言葉の鑄型・体験の鑄型が、身体感覚として整えられる」(四二四)という。

これらの豊富な語りを著者は、一九七〇年代の《民話》が収集し、成型していった語りのあり方と類比する。都市化や開発に

異議申し立てをする《民話》は、「現実に

その地に毎日暮らす人々の生活の改善に理解を示し」(四四〇)ていたのである。人々の「生活の理」にもとづく語りを提示し、それらを採集してきた「研究」の流れに目配せもしながら著者は、「一つの型に囚われた」もの見方への注視も怠らない。それらの「話型」が「世間をどのように見ていくのか」という視野を規定してしまう」(四四二)可能性が、常に伏在しているからである。

9章と10章は、第三部「鉄道とトンネル」と口承——近代の暴力性を馴致する物語——に区分される。この二つの章では、これまで本書が取り上げられてきた内容が距離化され、反復されている。物語に接近し、〈あるく〉ことでえられた語り、自らがみた風景からえられた視点を示しながら、しかし、筆者は、それらに全面的には依拠してはいない。いや、そこで語られてあるものが、かつての研究分野における《昔話・伝説》にも、そこからは距離をおいた《民話》にも収斂させない必要がある。もちろん

ん、単純な意味で《伝説・民話》を称揚することもできない。

そこで逆説的に呼び起こされるのが、第9章の鉄道忌避伝説である。鉄道忌避伝説は、これまで民俗学関心を持たれてこなかったにもかかわらず、「史実とのズレを意識させることがない真実味を有する」(四五二)点において、民俗学的な意味での伝説の定義に準じている。この矛盾した存在が、本書のテーマそのものである鉄道の始源に関わる物語なのである。それは、線路と地域社会との一次接触ファースト・インパクトの傷痕と

いった方がいいだろうか。テキストに刻印された起源伝説へと接近することで、この章は、本書が論じてきた《伝説・民話》と、それらを超克したようにみえる《昔話・伝説》の両方を、相対化しようとしているかのようなのである。

また、七〇年代の《民話》にも新たな留保が付加される。「線守稲荷」の由来をめぐる検証では、車窓によって切断された生活、すなわち「家をかすめるようにトンネルに飛び込んでいく列車の車内や頭上

の高速道路を走る自動車の車内と、生活する人々の間にある空気の断絶」を、「情緒に訴える《民話》は捉えきれしていない」(四九四)と評価される。民話については一〇章でも、人々の心の暗部についての物語が、「語りつくすべきではない話」として排除排除(五三三)されることへの懸念が表明されるだろう。

そして、第10章は、本書がたどってきた過程をもう一度、振り返る記述となる。そこで確認されるのは、近代以後の伝説をめぐる身体とその移動のありようである。スタンブや伝説集、民話集から「テープ起こし資料」まで、多層的な事例が再配置される。序章や1章でも示された祖谷の事例の別の側面も報告されている。それらは、〈あるく〉〈たずねる〉〈みる〉〈きく〉といった身ぶりの再評価といってもいい。

また、それらの身ぶりを否定したはずの柳田の伝説論、いや「郷土研究」への目配せも忘れられてはいない。さらには、《民話》が再構成してきた語りについても、「民俗学や口承文芸研究が視野に入れな

かった言葉を聞き取ってきた意味を考え」(五三三)る必要性が説かれる。互いに背反し、折り重なってきた言説とそこで繰り返される身ぶりは、「地面との接触を失っていく身体のある方に疑問を抱きながら、消費経済に流されてきた近代日本人の足跡」(五四四)として再指定されている。

本書の特色

ご覧のように、本書は3部10章から構成されている。これらの章の多くは、一〇年以上にわたって書き継がれた個々の論文に加筆修正を加えたものである。そのため、本書全体としては記述や論点に重複があったり、ズレがみられたりすることもあ

る。しかし、各章とその配列にいくつもの仕掛けが施されていることは、これまで紹介した概要からも理解してもらえらるはずである。それでも、時代も地域も広範にわたり、質を異にする膨大な資料が投入された本書をまとめることは容易ではない。しかも本書の魅力の多くは、その微細で具体的な

場面にこそ現れる。古書店からサルベージされた資料のひだに埋め込まれた時代の記憶、様々な地域、場所、路線、道に刻印された人々の眼差し、それらをつなぎ合わせる著者の複声的な《声》の妙こそが、書物というメディアの奥深さを再認識させてくれる本書の魅力の一つである。以下ではそれらの魅力が半減することを承知で、本書の顕著な特質となる著者の独特の眼差しについてまとめてみたい。以下にみるように本書では、記述の対象、資料、時代、学問／思想的枠組みと実践の全てにわたり、常に相対的な視座のもとに議論が開かれている。

まず、対象について考えてみたい。本書はそのタイトルが示すように、旅と移動をテーマとしている。それらを具現化するものとして、人びとを近代の旅へと誘った鉄道や自動車があり、旅を彩り、旅への想像力を喚起する物語を記した無数の印刷物があつた。さらに実際の旅や旅への想像力のなかで、物語を上書きし、経験を刻印することを実践する人びとの身体があつた。

最初に述べた交通網、紙媒体、身体は、各章ごとに重点の置き方は異なるものの、本書を基底する記述の対象にちがいない。

しかし、本書では、いずれの対象も実体化されていない。これは、既存の学問分野を見渡せば、いかにも奇妙な記述の作法にみえる。例えば歴史学者は、文献資料を前提として、そこに表出された文字のなかに特定の時代の「歴史」を読み取るうとする。民俗学者は、ムラや伝承母体を前提としたうえで「民俗」についての議論をはじめることができ。口承文芸の研究者たちは、特定の話型や歴史的な祖型を踏まえつつ、比較や分類を行うことが可能である。要するに研究者は、各々の専門分野ごとに何らかの対象を実体化したうえで、テーマを固定し、議論を展開していく。

ところが本書は、最後まで実体化された対象を前提とすることはない。なぜなら、本書が対象とする交通網も身体も、その両者を媒介し、接続し、切断する様々な紙媒体も、すべてメディアに他ならないからである。メディアは、何かを現し、それ

らを伝えるけれども、決してそれらを固定し、その動態を停止させることはない。それらを既存の研究分野の視点で固定化し、分節化することは不可能である。むしろ、野村は意図的に各々のメディアとしての融通無碍さをトレースし、その動態を追認しているようにもみえる。

実際、時代設定についても、筆者は独特の視点を示している。歴史学を中心とした研究者たちは、社会制度や政治状況、生産体制などを指標として、特定の時代を実体化しようとしてきた。中世と近世、近世と近代といったマクロな時代設定も、一九二〇年代や三〇年代、あるいは高度経済成長期といったややマイクロ時代設定も、そのような指標のもとに確定されてきたのである。ある時代とその前の時代、あるいは後の時代とを分かち視座そのものが、研究分野の歴史認識として重視されていくといつてもいい。

しかし、筆者は特定の時代についての一定的分節化を行うものの、決してそれらを絶対的な指標とはしない。それどころか彼

は、時代の切断面よりも、連続面を強調することがある。本書では、戦前の《伝説・民謡》と一九七〇年代の《民謡》が対比的に見いだされてきた。つまり、戦前と戦後を表象する物語とそれによって喚起される移動の形態から、時代を区分する記述を行っていたわけである。しかし、その一方で、《伝説・民謡》を論じる資料には、しばしば戦後の資料が登場する。それどころか戦後の「民謡運動」とも重なる一九六〇年代には、《伝説・民謡》に沿った「男」の旅が「三〇年代同様の活況を迎えている」（二五二）とも論じている。「民謡運動」をめぐっては、五〇年代と七〇年代とのあいだにズレが見いだされていた。しかし、他方で彼は、「一九七〇年代の《民謡》は、やはり五〇年代の『民謡』の思想を引き継いでいる」（四五五）とも述べている。

今日のフィールドワークが踏襲する構造は、機能主義的な視点をあらかじめ放棄している。構造＝機能主義的な視点では、制度面や地理的な条件の重なりの中で一定のまとまりをもつと考えられる小規模な地域が設定され、その内的なシステムを前提として議論が行われる。しかし、本書は、そのような地域を前提とはしていない。トライフックス交通網の赴くままに著者の行く先は、多方面に分岐していく。四国の祖谷、福島県中通りや西白河郡、神奈川県川崎市、千葉県安房郡、愛知県奥三河地方、などなど。繰り返し参照される複数の場所があるにしても、そこで聞き取られた語りが特定地域の社会制度なり、歴史的な出来事に還元されることはない。

もちろん著者は、これまで散々批判されてきた「想像の共同体」としての「日本」といった圏域を前提とすることもない。むしろ彼は、ナシヨナリズム論の文脈では評判の悪い柳田のなかに国民国家への想像力を喚起し、個々の思考を停止させる《神話・伝説》とは対局の視座を見いだしている。筆者が本書の最後に記すのは、膨大な資料の果てに事後的に見いだされる「日本人」だが、その視点は、「郷土で或ことを明らかにしよう」とした柳田國男の視点と対比されるべきかもしれない¹⁾。

第三の特質として本書では、検証される研究者の思想的枠組みやその実践について、常に複眼的で相対的な視座から捕捉されている。その端的な事例は、本書での柳田國男についての位置づけである。彼は柳田の伝説論が開始された現場において、それとは異なる位相に《伝説・民謡》を見いだした。世俗的な魅力や書齋へと還流する想像力によって展開してきた《伝説・民謡》を背景に据えたいうで野村は、柳田の議論を「人々の楽しみからかけ離れた極めて不自然なものだった」（二二八）と位置づけた。それは、柳田國男の伝説論についての批判であることは間違いない。

だが、野村は決して、柳田の可能性を完全には手放さない。彼はその視点を《昔話・伝説》と位置づけたうえで、自らの足で〈あるき〉〈きく〉対象として、カード化によ

る分類、体系化を行う採集の対象として再構築していく。こうして《昔話・伝説》は、「目・耳・言葉を自らの感覚としてはたらかせていく近代のあるき方、さらには世の中の見渡し方、ものの考え方の啓蒙として理解」(二二八)されることになる。また、柳田が牽引した《昔話・伝説》は、戦前の日本における国家主義に収斂する語りから常に距離をとるものであったとも記されている。

同じことは、戦後に展開していった《民話》にも言える。第5章で示したように五〇年代の「民話」には、「支配階級」に対する「民衆の抵抗」が刻印されていた。しかし、一九七〇年代以後、マスメディアに展開していった《民話》からは、そのような政治性は抜け落ちていく。それらは文明と自然、都市と田舎、新しいものと古いものといった二分法のなかで、後者から前者への警鐘という意味づけのもとに語られていった。第8章の末尾では、著者が聞き取った豊富な事例についての分析を経たあとで、《民話》が評価されている。そ

れらは「生活のなかで確かに感じられていた違和感」を、「経済成長を優先する社会への警鐘として発信」(四四〇)する結節点となっていた。

いくつもの留保を加えながら、《民話》の歴史的意義を著者は再評価しようとする。そのような眼差しは、《民話》の伝承動態にも注がれる。現代の《民話》の多くは「担い手の側にもその意義を認められたもの」(二七〇)になりつつある。それらは一定のカリキュラムを学んだ「語り部」によって伝えられ、語りと聞き手のあいだの「相槌」が消去された語りでもあった。それでも彼は、そのような「民話」という伝承動態を認めてもよいのではないかという気持ちを実は抱いている」(二七〇)という。

他方で、彼は《民話》についての懸念も繰り返して表明する。五〇年代から七〇年代に至る《民話》の変容を著者は、単なる発展とは捉えない。例えば、七〇年代には、工場労働の現場で「労働者が取り組んだせめぎあい」が《民話》として発信されること

はなかった」(四七三)という。政治性を孕みつつも、「資本家の搾取」といった言葉とともにかつて「民話」の周辺にあった「人々の声を「愛情あふれる現代の《民話》の視座」は、放棄してしまった。そう、著者は評する。すでに述べたように《民話》には、「人々の心の暗部が物語られる部分を受け入れない」という問題も指摘される。その種の物語から「生活の理」の周辺に漂う語りと身体が、排除されたことへの違和感が吐露されている。

逆に著者は、物語の反復や模倣を示す態度として「一つの型に囚われ」る身体にも、複層的な意味を含み込ませていく。そもそもこの言葉は、《伝説・民話》の身ぶりにむけられた柳田の批判の言辞であった。しかし、著者は、この言葉を戦時中の《神話・伝説》や戦後の口承文芸研究、デイスカバー・ジャパンで再現された《民話》にも投げかけていく。それが、「世間をどのように見ているのか」という視野を規定し「(四四二)たり、「思考停止の状態が導かれかねない」(四九七)ことへの危惧は、繰

り返し表明されている。

しかし、それでは「型」に囚われない語りが希求され、特権化されたのかといえ、決してそうではない。彼は、「出来事や体験を言葉としてくり出す際に依拠するところを求め、意識せぬまま「模倣者」となっている」現実を指摘する。「柳田の希望とは裏腹に、体験は自由自在に言葉にされているわけではない」(三一六)のである。世間話の「型」について論じた別の場所でも著者は、「前例、すなわち、「型」のない暮らしは、楽ではない」(四四一)と嘆息する。我々の生活する世界とは、「型」と身体との相互作用のなかでこそ、生起している、いや、せざるをえないのである。こうして著者の視点は、生活者の語りからも、研究者やアクティビストの言説からも、もちろん、商業的なメッセージからも等しく距離を保ち続けることになる。

本書の可能性と課題

本書には様々な可能性が潜在している。ただ同時にそれは、本書の課題ともなる。

これまでみてきたように本書は、徹底して対象を実体化せず、資料と一定の距離化をはかり、研究者や運動家の言説にも冷静な視線を注いできた。柳田国男も「民話運動」も、あるいは戦前の伝説と民謡の位相も、「生活の理」から立ち上げられた人びとの語りさえ、絶対的なものと捉えられることはない。そのような視線が見いだしたものとそこで浮き彫りとなった課題の両面を、提示する必要がある。以下では、誌面の都合もあり二つの点に絞って可能性／課題を指摘しておきたい。

まず本書は、既存の「口承文芸」の再編を促す企てとして読むことができる。とりわけ「伝説」、「世間話」といった術語をその内側から揺さぶり、ずらしていく。著者は、それらの術語をそれらが成立した歴史の動態へと送り返すことで、術語の輪郭をかたどる研究者たちの眼差しを相対化し、同時にその周辺に付帯していた意味と実践の広がり明らかにしてみせた。しかも、それらの意味と実践の広がり、彼自身フィールドワークの調査旅行によって、今日の研究のなか

にあっても生きられたものとして提示されている。このような時間的空間的な広がり示すために本書は、《民謡・伝説》、《昔話・伝説》、《民話》といった二重のジューメを必要としていたのである。

ただし問題は、ここからである。例えば筆者は、世間話が「昔話の型と同じ地平」には設定しえないと述べる。世間話とは、「生活の舞台に焦点をつくる説明の言葉」(三八七)であり、「昔話」のような「カードとしての資料整理」(三八八)にはなじまないからである。さらに「伝説」という領域にいたっては、「世間話」としての切り取り方さえも有効ではないと看破される。

しかし、ここで組上となっている「昔話」、「伝説」、「世間話」の諸カテゴリーは、本来に意味を失効してしまったのだろうか。戦後の民俗学が、分類と比較の基準として用いてきたこれらの術語概念、その下位分類として整理されてきた昔話の話題や、伝説の分類項目なども、もはや否決されるだけの存在なのだろうか。仮に否決しないまでも、それらを宙づりにしたまま、各々の

研究が可能なのか、という問いも残る。実際、本書はこれらの術語を、批判的な立場を貫きながらも、使い続けているからである。著者の記述の向こう側には、既存の術語や概念を全く消去するのか、それとも、

それらの術語に新たな意味を充填するのかという、決定的な課題が横たわっている。

次に本書は、既存の民俗学や人類学、あるいは口承文芸研究が、暗黙のうちに前提としてきた記述のあり方に冷静に、しかし、断固とした疑義をはさんでいることである。

すでに指摘した本書の記述の特質は、既存のデイシプリンの枠組みを、やや懐かしい言葉を使えば、脱構築することに成功したかに見える。著者は、大上段に構えて特定の研究分野を批判したり、論難したりすることは、ついにない。しかし、時代を画する指標を絶対的なものとせず、生活空間を固定しない記述自体が、既存の研究分野が自明とする学的な態度を根底から揺さぶることになる。同様に前景化されたテーマは、すべてメディアとしての動態を内に

孕んでいる。このことは、鉄道の「歴史」、あるいは鉄道の展開に伴って展開した伝説や民謡の「変容」といった平坦な視点を裏切りつづける。

それは国民や民族、あるいは伝承母体やムラといった実体概念の否認に留まらない。特定の時代や地域といったミクロな

記述に終始する近年の民俗学や文化人類学に対する強力なアンチ・テーゼとなりうる。本書は近代の日本という時空について、人と情報とモノが行き交い、その結節点のなかで多様な振る舞いをみせるアクター・ネットワークの世界を記述しえたようにもみえるのである。²⁾

それは、決して抽象的で理解し難い世界ではない。むしろ、我々の多くが日常的に感じている身体化された知覚にもっとも肉薄するものである。我々の多くは、根源的な信仰や象徴に準じているわけでもなければ、機能と構造に則った社会制度に感じられなくなっているわけでもない。便利な交通手段であれば鉄道も自動車も利用するし、役に立つ情報のためなら印刷物

や電話、ラジオやテレビも購入する。時代や空間、経済的な制約をうけながらも、自らの趣味や関心、こだわりや付き合い、義務や責任に沿って多方向に開かれた世界のなかに生活している。そこで得られた情報を身体化しながら我々は、世界自体についての解釈枠組みを構築し、選択し、整理

し、理解している。けれども、自らの身体を介した世界とのアクセス自体が、解釈枠組み自体を更新させることもある。そのような世界と我々との融通無碍なあり方を、著者は、この本を通じて展開し得たのではないだろうか。

もちろん、このような記述のあり方は、諸刃の剣である。それは本書を記す著者のポジショナリテイの曖昧さにつながる。本書が成し遂げた記述——近代から現代に至る幅広い時代を視野にすえ、聞き取りから文献資料までも見通した記述——は、どのような立場、認識によって可能になるのだろうか。「文化を書く」^{ライティング・カルチャー}以後の民族(俗)誌記述では、このような特権的な著者の視点³⁾が、しばしば批判的とされてきた。

本書に沿って問いなおすならば、次のようにも言えるだろう。ある時は柳田国男を擁護し、ある時は距離をおく。《伝説 民謡》の楽しさに触れながら、(男)の特権的な言説を保証する空間でもあったことを指摘する。《民話》に込められた警鐘を受け止めつつ、それらがふるい落としてきた語りの存在をあぶり出す。その絶妙のバランス感覚を維持する評価基準は、一体、どこにあるのだろうか。それが明示されないままに展開する本書の記述は、研究分野の理論的、方法的な混乱を招くばかりではないのか。そして、筆者の視点の融通無碍さとは、ダブルスタンダードの言い替えに過ぎないのではないのだろうか。

おそらく、本書が提示する膨大な資料と記述に圧倒された読者のなかには、このような感想を抱く者がいても不思議ではないと思われる。

おわりに

それにしても、著者は、一体、どのようにしてこれまで指摘してきたような記述

を手にしたのだろうか。その背後に彼の粘り強い調査旅行の軌跡を措定することは容易い。あとがきに記されている幾人もの先達や同世代の研究者たちとの活発な議論から得たものも大きかっただろう。しかし、ひよつとすると彼の視座には、現代という時代がもたらしたある種の諦念が潜在しているのではないだろうか。ふっと、そんな感想をいだいてしまったことも事実である。

一つの終焉を見通した後からの眼差し、沈黙を抱え込んだ饒舌さのようなものを著者の記述から感じるのには、果たして評者だけだろうか。今日の民俗学や口承文芸研究がおかれた絶望的な状況を鑑みれば、そんな感想が、あながち的外れだとは言いつれないはずである。もちろん、「学」の向こう側、終焉からの再創造への意志もまた、本書に潜在し続けては、いる。

今日、あらゆる旅の軌跡が、折り重なる交通網に蹂躪され、テラバイトの情報と言説が瞬時にネットを駆け抜け、他ならない我々自身の身体も常に揺れ動いている。た

とえそのようななかでも、筆者は、自らの旅する身体を手放そうとしていない。その粘り強い意志こそが、この終わりゆく学問をその底辺で支え続けるものかもしれない。それは、地域社会を盾にとったり、文書資料に頼ったりすることで実証性を担保する民俗学のありようとは確かに異質なものである。共同体のなかに生きる人々が、同郷の心意をあぶりだす方途として構築された民俗学とも大きく隔てられている。

だが、良きにつけ悪しきにつけ著者の視座は、現代の民俗学が選びとった学問の「型」だったのだ。他者の視点を内在化しつつ、その視点を相対化できる者は、やはり、どこかで共同体と共同体の狭間にたたく者、旅の途上の者でしかない。そのような屈曲し、折り重なった視点のなかにこそ、現代に連なる民俗学の命脈は、わずかながらでも保たれている。

いずれにせよ著者は、その歩みを止めてはいない。「遅効性の学問」を韜晦的に語りつつも、彼の視点は、先を見続けている。

それは歴史を「悔恨の書」といいながら「風景の成長」を信じようとした昭和初期の柳田の眼差しとも、決して断絶してはいないはずである。だから、たぶん、民俗学の旅も、終わってはいない。そんな（いながら）の空想くらいは、許されてもいい。

もちろん、その旅の果てがいかなるものなのか、旅の中で見いだしたものは何だったのか。そもそも、終着駅への旅程は示されているのか。著者にも、その答えは用意されていないだろう。それでも、この味わい深い著書の読後として、評者もまた、こう呟かざるをえない。

「まだだ、まだ、おわらんよ。」

注

(1) 「郷土研究と郷土教育」一九六二（一九三三）『定本柳田国男集』二四、筑摩書房。

(2) アクターネットワーク論については、ブルーノ・ラトゥール一九九九『科学が作られているとき—人類学的考察』川崎勝、高田紀代志訳、産

業図書、足立明二〇〇一「開発の人類学—アクターネットワーク論の可能性」『社会人類学年報』二七、上野直樹、土橋臣悟編二〇〇六『科学技術実践のフィールドワーク…ハイブリッドのデザイン』せりか書房、などを参照のこと。

(3) 文化人類学における民族誌批判については、ジェイムズクリフォード、ジョージマーカス編一九九六（一九八六）『文化を書く』春日直樹他訳や、ジョージ・マーカス、マイケル・フィッシャー一九八九（一九八六）『文化批判としての人類学—人間科学における実験的試み』永瀬康之訳、紀伊國屋書店などを参照のこと。もともと、これらの批判から、一体、何が新たに生みだされたのか、あるいは生みだされたなかったのか、に関する議論は、もはや学会の「黒歴史」となりつつある。（かわむら・きよし／国立歴史民俗博物館）

受贈図書紹介

米屋陽一『口承文芸と国語・教育』（米屋陽一民話伝承研究室、二〇一一年五月二十九日、頒価三〇〇〇円）
渡辺伸夫『椎葉神楽発掘』（岩田書院、二〇一二年六月、四八〇〇円＋税）
三浦佑之『古代研究—列島の神話・文化・言語—』（青土社、二〇一二年一月一五日、二四〇〇円＋税）
下野敏見『鹿児島ふるさとの昔話2』（南方新社、二〇一二年一月二〇日、一八〇〇円＋税）
末次智『琉球宮廷歌謡論—首里城の時空から—』（森話社、二〇一二年一月二五日、八二〇〇円＋税）
岩本通弥・菅豊・中村淳編著『民俗学の可能性を拓く—「野の学問」とアカデミズム—』（青弓社、二〇一二年一月四日、二〇〇〇円＋税）